

## 夜のおとなの金曜講座

仕事や学校の帰りに、気軽に美術館へ立ち寄ってほしい。そんな思いから「夜のおとなの金曜講座」は始まった。好奇心を触発し、モノを視る楽しさを知れば、より美術館に足を運ぶ回数も増える。こうした狙いから、教材ボックスを中心に、「視るは楽しい教材ボックス」「大分県から絵の具をつくる」「美術からみた文化」「素材と技術」という4つのテーマを設け、毎週金曜日の夜に開催している。この講座は続けるうちに口コミでだんだんと参加者が増えていき、今では癒しの時間として仕事帰りに参加される方が少なくない。



### 1 視るは楽しい教材ボックス

4つの教材ボックスから順次テーマを見つけて、資料の詳細に制作秘話を交え、時には資料を手にとったり、素材に触れながら紹介している。じっくり“視る”ことは楽しい!を体感する講座だ。

#### A

「ストーン・ボックス」より

#### 【 石の引力・鉱物 】

絵の具のもとである顔料の多くは鉱物だ。藍銅鉱(らんどうこう)、孔雀石、辰砂(しんしゃ)、石黄(せきおう)、方解石、水晶。結晶化した鉱物の美しさは人を魅了する。ストーン・ボックスを見ながら、絵の具のもとで、しかも大分県に在る鉱物の話をした。中央構造線と南海トラフのまじりあう津久見湾周辺では、年間8mm動くプレートからの隆起により、石の色は他の地域に類を見ない。鉄分を多く含む石は海の中の酸素が多ければ赤く、少なければ緑になるという。大分県で鉱山が稼働していたころ、各地の鉱山に出かけて鉱物を採集した野田雅之氏によると、佐伯市宇目の木浦鉱山では美しく青い藍銅鉱や緑の孔雀石も採れたという。別府金山(現・ラクテンチ)や大分市丹生川の上流では辰砂が、豊後大野市松谷や佐伯市の屋形島では赤鉄鉱(ヘマタイト)も採れたそうだ。そう聞くと居ても立ってもいられない。広域地図だけを頼りにスタッフで数カ所行ってみたところ、それらの鉱物がいくつか採集でき、ストーン・ボックスに収納している。講座内でそれらの石を見た参加者から「吸い込まれそう」との声があがった。石には引力がある。気を付けないと取り込まれそう。



#### 【 石の引力・色が残る 】

ストーン・ボックスの顔料を見ながら、大分の歴史遺産である磨崖仏に残る色彩の話をした。多くの仏像や神像と同様、もともと磨崖仏も彩色されていたらしい。しかしほとんどの磨崖仏は経年変化で色彩は失われてしまった。そんな中で白杵磨崖仏は1000年程前の色がわずかに残っている。白杵市文化・文化財課の神田高士氏立ち会いのもと、白杵磨崖仏の柵の中に入り、ディテールを実見する機会に恵まれた。離れて見ると着色なのかカビなのか苔なのかかわらな

いが、間近で見ると顔料の色彩と有機物との違いがはっきりと見てとれた。緑土の美しさ、弁柄と黄土の塗り重ね、混ぜ具合による多色表現から、仏像全体に塗られていた制作当時はさぞ美しかっただろうとの想像は難くない。また当時はお堂の中。薄明りの中で見る美しさ、さらには古園の前に広がっていた池に太陽の光が反射してお堂の中を照らす様は、まさにこの世の浄土というインスタレーションだったのではないかと。1000年前の色彩に思いを巡らすとドキドキする。



#### 【 石の引力・色が残る-2 】

顔料を見ながら1000年前の色彩についての話をした。国東半島豊後高田市にある富貴寺大堂は、平安建築の一つとして国宝に指定されている。大堂の中、壁画で使用されていたと思われる顔料は退色が進んでしまったが、描かれた当時は多彩で鮮やかだったようだ。大分県立歴史博物館にはその復元模型が展示されている。

鉱山の多い大分県だが、県内で産出する鉱物は果たして絵の具として使われたのだろうか。県内を歩き回り、採取した石を砕き、土をふるいにかけて、カラフルな色彩に目を見張る。歴史的にはどこにも記述されていないが、こんなに多くの色彩が得られるのなら、何かを描く時に使っていたのでは?と思ってしまう。この話を絵の具の研究や修復を専門とされている森田恒之氏に話したところ、それは十分あり得ること。足元に転がる石ころだが、歴史に登場した色だと想像すると、もはやただの石ころとは思えなくなった。